



「ハイブリッド・エコ・ハートQ住宅の科学」③ 水分・湿度・空気線図・環境編

25・26pの紹介

史幸工務店では、左写真の「ハイブリッド・エコ・ハートQ」③水分・湿度・空気線図・環境編の他、住宅に関連する環境について、4分冊の小冊子を発行しております。住宅建築は、単に住宅を建てればよいというわけではなく、断熱性能などさまざまな数値によって性能管理が行われています。住宅の性能には、明確な基準があり、素材の採用や施工方法にも明確な根拠があります。それを項目毎にまとめたのが上記の小冊子です。これから順次、抜粋してご紹介致しますが、本冊子に興味のある方は、電話・インターネット等でお申し込み頂ければ差し上げます。

人類の未曾有の危機、温暖化防止は可能か？

2020年問題に、拍車を掛ける「地球温暖化」という新たな問題。

◎パリ協定は気候変動枠組条約に加盟する、全196カ国全てが参加した。

ローマ・クラブの「成長の限界」という論文は、マサチューセッツ工科大学のデニス・メドゥズ教授の下で国際チームがとりまとめた研究成果として1972年に発表されました。「人口増加や環境汚染など、現在の傾向が続けば、100年以内に地球上の成長は限界に達する」と警鐘を鳴らしています。論文には「人類が自然が与える事が出来る量、以上のものを消費し続けるシナリオで進んでいくと、2030年までに世界的な経済崩壊と人口の急激な減少が起こるかも知れない」と予測し「政府が人類の【環境容量】の拡大を抑え込むことが出来る政策を編み出して、そのための技術開発に投資するならば、経済成長を持続させることも可能である」とも述べています。オーストラリアの物理学者、グラハム・ターナーは、1970年から2000年までの現実のデータと「成長の限界」のシナリオを比較して、現実には「成長の限界」の予言にほぼ沿って進んでいることを明らかにすると共に「ここでは警告の半鐘の音が、明らかに鳴り響き続けていて」「私達は持続可能な軌道から外れている」と警告しています。2020年問題と言われるものは、40年前の科学を総動員した未来予測に、どの様に対応すべきかという問題で、国際的な環境破壊に対する、全人類の取り組みでなければならないのです。

●パリ協定 公式文書【国連気候変動枠組条約】の議論

表.9

		地球温暖化と気候変動
経過	地球気候史	氷河期 / 最終氷期 / ヤンガードリアス・完新世温暖期・ネオグラシエーション / 中世温暖期・小氷期 // 過去の気温変化 …その他
	問題の経過	地球寒冷化・世界気候会議・スターン報告・IPCC第4次評価報告書 ・近年の地球温暖化対策
原因	要因とメカニズム	温室効果(温室効果ガス)・太陽放射・太陽変動・日傘効果・エアロゾル ・アルベド・炭素収支(吸収源・森林破壊)・海洋循環・大気循環・大気変動 ・ヒートアイランド・軌道要素変動・地殻変動 …その他
	考え方	放射強制力・気候感度・気候因子
	気候モデル	GCM
影響	大気圏	気温上昇・氷河融解・異常気象の増加・極端化・気候の変化
	水圏	海面上昇・海洋酸性化・熱塩循環の停止 …その他
対策	緩和策	低炭素社会(オフセット・ニュートラル)・省エネルギー・環境税・吸収源活動 ・再生可能エネルギーの利用・排出取引・クリーン開発メカニズム・共同実施
	適応策	・二酸化炭素貯留・温暖化関連政策・温暖化防止活動 …その他
	枠組み	パリ協定・IPCC・持続可能な開発目標(SDGs)・京都議定書・ポスト京都 ・気候変動枠組条約・APP・ECCP・IUGG・IGU・地球地図・仙台防災枠組 …その他
議論	懐疑論・暴走温室効果・スベンスマルク効果・ホツケースティック論争・クライメイトゲート事件	

地球の温暖化には根拠がないと主張する、学者の論拠とは？

◎トランプが温暖化は「フェイク・ニュース」だという論拠となる議論。

前ページ、表・10【パリ協定 公式文書 - 国連気候変動枠組条約の「議論」】の中でいま、地球温暖化の原因について「人為的な問題で温暖化が起きている」と主張する学者と「地球環境や宇宙線、太陽活動」などの自然現象が原因と主張する学者達の主要な論争の一部を紹介致します。

懐疑論

気候温暖化に対する懐疑論とは「地球温暖化は人為的なものでない、地球は温暖化していない」等とする学説や意見です。地球物理や天文学者、気候学など、地球温暖化否定論者が最も多いのが懐疑論です。主な懐疑論は【人為説全般説・水蒸気説・太陽活動説・宇宙線説・紫外線説・太陽風説・小氷期からの回復過程説・地球寒冷化説・二酸化炭素の温室効果についての議論・人為的放熱説】などがあります。

スベンスマルク効果

デンマーク工科大学の物理学者ヘンリック・スベンスマルク博士は1997年、宇宙線の減少によって地球の雲の量が減少し、アルベド（反射率）が減少した分だけ気候が暖かくなった可能性を提唱しました。「太陽磁場は宇宙線が直接地球に降り注がれる量を減らす役割を果たしているため、太陽活動が活発になると太陽磁場も増加し地球に降り注がれる宇宙線の量が減少する」それが温暖化の原因で人為的ではないと主張しています。この説に反対する学者は「実際に気候に影響しているという確証は見つかっていない。複数の科学的報告も宇宙線が実際の雲量や近年の地球温暖化に影響を与えている兆候はないと否定。現在観測されている温暖化は確率90%以上で、人為的な要因が主因であると評価されている」と主張しています。

ホッケースティック論争

古気候学者のマイケル・マンは木の年輪から過去1000年以上の気温変化を見積もった結果を発表。その過去の気温変化が19世紀以降の急激なカーブを示していたため、その気温変化の曲線は「ホッケースティック曲線」と呼ばれるようになりました。初期資料に間違いがあることが発見され、地球温暖化は捏造されたと批判されましたが、修正後も同様のカーブになり、現在は論争にも終止符が打たれています。

◎金星の大気と水は「暴走温室効果」で失われ、地球も同じ運命を辿る？ 暴走温室効果

気候科学者ジェイムズ・ハンセンは著書『地球温暖化との闘い』で【仮に現在埋蔵されている原油、ガス、石炭をすべて燃やし尽くした場合、暴走温室効果が引き起こされる可能性は十分にある。さらにオイルサンドやオイルシェールも燃やすなら、必然的に（ビーナス（金星）・シンドローム）が起きると、私は確信している】【金星は分厚い大気を持つが、その96.5%はCO₂で占められており、地表の温度は摂氏480度以上に達する。金星の水は、はるか昔に蒸発し、宇宙空間に拡散してしまった。CO₂による温室効果で気温が上昇すると、海から、より多くの水分が蒸発する。水蒸気も温室効果ガス的一种であるため、これによりさらに地球温暖化が加速するというメカニズムだ。この正のフィードバックは現在も進行中だ。化石燃料を燃やし続けるとこのプロセスが暴走し、海が完全に蒸発して地球が生物の住めない星になる】と警告しています。この様な終末的な議論もあります。